

学校で過ごしていた記憶がある。また、職員旅行の時も必ず娘が同行するという、今では考えられない古き良き時代。小学校に入ってから、校内では「鈴木先生」と呼ぶように教えられた。職員室にも「鈴木先生いませんか？」と尋ねていく。子ども心に公私を分けることの大切さは理解していたので、余程のことがなければ保健室に行くこともなかった。こうして、私が義務教育の間、母娘は同じ学校に通った。

結婚当時に話を戻そう。あきは昭和33年12月、35歳の時にお見合い結婚をする。相手は離婚歴のある寿司職人。職人としての腕はすこぶる良いものの、パチンコが大好きで妻の稼ぎをあてにする道楽者。あき本人はあまり口にしなかったが、結婚後の苦労はかなりのものだったに違いない。昔、結婚して唯一良かったことを聞いたことがある。「シャリの上手な炊き方を覚えたこと」という答えにはさすがに笑った。

娘が生まれてまもなく夫と別居し、あきは立木小学校の教員住宅に住むことを決断。そこから母娘2人の生活が始まる。父親としては娘のことを可愛がっていたようで、忘れた頃に住宅をたずねてくることがあった。母の話から感じ取っていたのか、幼い私は「母親を苦しめている人」に來られるのが嫌でたまらず、押し入れに隠れていた記憶がある。ずっと別居状態だったが、社会人になった娘の達ての希望で両親は離婚。今でいうシングルマザーでも、経済的な苦労を一切せずに生活できたのは教員という仕事があったからに他ならない。

「学校から帰ったら母が倒れているかもしれない」と、小さい頃から天涯孤独になる不安を抱き、一人になっても自立して生きていくために仕事をするこの大切さは、親の背中を見ながら感覚的に教えら

れてきたように思う。

子育てには厳しかった。いくら遊んでいても勉強について注意された記憶はないが、挨拶や態度、嘘をつかないなど口酸っぱくなるほど教えられた。

当時のことなので、反省させるために外に出されることもあった。はじめのうちは「おうち入れて！」と言っていた私の声がいつの間にか聞こえなくなる。外を見ると娘がいない！「誘拐されたのでは」と思っ、近所を必死で探したことがあった」と笑って話してくれたことがある。当の本人は隣りの家で夕飯をちやつかりごちそうになっていたというオチだが…。

また、「人前で親のことはお母さんではなく、母と言うんだよ」と、小学校低学年の頃には教えられていた。家には同僚の先生方や着物屋など業者の人をよく訪ねてきたが、大人同士の話の中に口を挟むことを嫌い、客人が帰ると注意されることもあった。

立木小学校は教職員も含めて書道に力を入れている学校だったことから、家での書道の練習は毎日の日課。あきは複数の書道の会に作品を送っては段位を取得し、教職員の中でも書家だった教頭の次ぐらのスキルを持っていた。私も親の元で小学2年生から書道をはじめ、中学生まで一緒に日々練習を続けた。あきが95歳の頃、思い出したかのように筆を持ち、書いた字を茶の間に貼っていたことがある。その字が「何」という一文字だったため、そのシニールさに孫たちが大笑い。なぜ、選んだ字が何(なに)だっ

たのか聞いてみたかったな。

立木小学校で同僚だったのが、新採で娘の担任でもあった菅野（旧姓：佐藤）教子先生と20代後半だった山崎（旧姓：山田）恭子先生。別の教員住宅に住んでいた2人はあきのことを姉のように慕ってくれ、職場からの帰り道によく我が家へ立ち寄ってくれていた。得意料理の肉団子汁と一緒に食べながら話に花を咲かせるひとときは、あきにとって大切な時間だったに違いない。昭和41年には和歌山県、淡路島を巡る南紀への旅も。3人の女子旅についていった小学1年生の時の思い出は今も娘の記憶に残っている。

養護教諭は夏休みも呼び出されることがしばしば。その当時、学校にプールがなかったため、子ども達は村の中心部を流れる朝日川で泳ぐ。無茶なことをして溺れる子どももいた。地域には医者がいない。あきは一目散に川原に行き、人工呼吸をして子どもの命を助けた。「人の命を預かる養護教諭にはなるなよ」と、事あるたびに言われていたが、それは仕事の大変さを、身を持って感じていたからだろう。

一年間だけだが、尾花沢市の高橋地区に暮らしたことがある。赤倉温泉に行く途中にある小さな小学校に赴任した時は、地区の家に親子で下宿住まい。3歳の頃のことなのでうる覚えだが、住んでいた2階の部屋の下が牛小屋だったため、私はいつも「くちやい、くちやい」と言っていたらしい。その家には中学生くらいの息子がいて、よく遊んでもらった覚えがある。とにかく雪深いところで生活するのは大変だったと想像するが、母娘は人の温かさに触れながら生活していた。

そしてまた立木小学校に戻る。

私が小学6年になる年に西川町月山沢小中学校に赴任した。4月だというのに、グラウンドには1m20cmもの雪が残っていて、子ども心に「なんというところに来てしまったんだろう」と思ったもの。校庭からほど近い場所に建つ平屋の教員住宅で生活を始める。今のように交通機関も発達していない時代。冬が長く、住んでいた数年間で最も雪が積もった年は4mに達したこともあった。吹雪の日は母の背中に隠れ、雪を避けるように歩いていたことを思い出す。

月山沢小中学校は本校で、志津、二ツ掛、四ツ谷といった奥深い地域には分校があった。へき地といっても養護教諭が赴任するのは本校のみ。ただし、月山沢よりも奥地にある大井沢小中学校に養護教諭がいなかったため、生徒たちの健診の時には大井沢小中学校に出向き、校医のサポートをしていた。

昭和48年、私が中学2年の時、山形に土地を求めて家を建てた。借金をするのを嫌う性格から、建築費の支払いは現金払いだった。「こんなにたくさんのお金を持つことできないから」と札束を持たせてもらった感覚は忘れられない。

土曜日の授業が終わるとバスで山形市内にある自宅に戻り、掃除をしたりして、次の日には月山沢へ帰るといった生活を繰り返していた。娘は4年間月山沢に住み、その後高校進学のため山形へ。

母は、寒河江ダム着工のために閉校する一年前までの5年間、この学校に勤務した。

娘が高校2年になった時に、山形の自宅と一緒に暮らすようになる。新しい赴任先の西川町立東部中学校へ、あきは毎日、片道1時間以上かけてバスで通った。

その数年後、寒河江市立三泉小学校に異動し、定年退職を待たず、昭和55年3月にここで養護教諭としてのキャリアに終止符を打つ。退職してから、本人が嫌がっていたのは「先生」と呼ばれること。「先生と呼ばれる程のこととしてない」と言い続けていたのも母らしい。

あきは一人で子どもを育ててきたこともあり、人に頼ることが苦手な人だった。頼る人がいなかったのかもしれないし、全部自分で解決していかなければならない状況だったから当然のこと。だから、娘から見た母の印象は弱音を吐かない強い人。歳を重ね、病気による堪えられない痛みにも、パニックになっっている姿を見た時は本当にショックだった。

バカが付くほど生真面目で責任感があつたあき。付度が嫌いで、頑固なところもあり、それだけに融通の利かないところもあったが、その一本筋の通った生き方は誰もが真似できるものではない。生真面目な半面、親戚の集まりやデイサービスなどでは孫の人形を背負って踊って周りを笑わせたり、入院した後も同室の人達の気持ちをほぐすようなチャームミングなどところがあり、「目立つのは嫌だわ」と言い

ながら、どこにいても目立つ存在だった。

晩年は右耳が聴こえず、左耳もほとんど聴こえない状態だったが、認知の症状は見られず、病室のベッドには「脳トレ」の本や孫たちが小さい時に使った漢字ドリル、算数ドリルを置き、メガネをかけずに読んでいた。何歳になっても衰えない向上心は本当に凄いの一言。学ぶべき姿が身近にあったことに心から感謝している。

最期に。

たくさんさんの愛を、ありがとう。安らかに眠ってください。



オールへ

孫からの手紙

30年近く前のことなので私も記憶はあいまいですが、祖母（あきちゃん）におぶられていた時の背中の感触を、今でも何となく覚えています。妹が生まれるまでは父も母も働いていたため、私はいつもあきちゃんと一緒でした。

新庄まで電車に乗って、蕎麦を食べに行きましたね。覚えていますか？

名古屋や松島に旅行に行きましたね。覚えていますか？

改めて、自分の人生を振り返ると、そこには常にあきちゃんがいました。おおらかで、包み込んでくれるあなたの優しさに、私は育てられました。

大学進学のために上京したあとも帰省するたびに、まずは隣りの家に住むあきちゃんの元へ行き、そのたびに他愛もない話で盛り上がりましたね。結局、戦時中にマニラにいた時の話になるのがお約束でした。

戦争を経験し、乗り越え、母を育て上げたあなたは芯が強く、常に向上心を持った女性でした。熱心にクロスワードを解いては、私に質問してきたあの日。90歳を超えても妹の漢字ドリルや算数のドリルを借りては勉強に励み、「分数が解けるようになったわ!」と笑って報告してきた日のことは忘れません。とんでもない90代だと思ったものです。95歳で入院した際も病室で脳トレのドリルを解いていたのは衝撃でした。

今、私が東京でライターとして仕事をしているキツカケも、思い返せば、小学校の時にあなたと過ごした日々について書いた作文が、どこぞの銀行の賞をもらったからだったかもしれません。今の私のスタートラインにも、あきちゃんがいましたね。あなたが亡くなったと母から聞いて以降、仕事も手につかず、大きな喪失感に襲われています。それだけあなたは、私にとって大事な存在でした。私の人生に最も影響を与えたと言つていい存在です。

深夜、あなたとの思い出を1つ1つ思い出しながら、この文章を書いています。思い出があり過ぎて、1つ思い出すたびに、目から涙が溢れてきてしまいます。

今、コロナの影響で往来が制限され、このお別れの場合に私は赴くことができません。ただそれが悔しくなりません。まさかこんな形で別れの時が来るとは思いませんでした。コロナが憎くて仕方ありません。

現状が少しでも改善した時に、真っ先に挨拶に行きます。今も隣りの家に行けば、いつもの指定席に座り、テレビを大音響で観ているあなたがそこにいる気がします。その時はいつものように「あれま、今来たの？何時の新幹線？新幹線混んだ？」と、笑いながら聞いてください。

あなたの孫に生まれてきて、私は幸せです。多くの優しさと、多くの幸せを与えてくれてありがとうございました。

オールへ

孫からの手紙

祖母が亡くなったという一報を兄から聞いて、コロナで会いに行けないやるせなさを感じながら、2か月が経つ今もまだ現実を受け入れられずにいます。帰省して、隣りにある祖母の家に行っても「おかえり」という声がもう聞けないかと思うと本当に寂しくて仕方ありません。

学校から帰って両親が家にいないとき、隣りの家に行くと私が何も言わなくてもお漬物や白米、お菓子やお茶を用意してくれた祖母。食べ終わると新聞やフリーペーパーに載っているクロスワードパズルや漢字の問題を、73歳年上のおばあちゃんと一緒に真剣に考えたり。今はその何気ない日常が恋しいです。

よく話していたのは看護師時代のことや祖母の娘にあたる母の話。私が運動会の話をすると「実はあなたのお母さんも足が速くてね…」と、昔話が始まります。私が中学校や高校の制服姿や大学の卒業証書を見せた時、就職が決まった時は、自分のことのように喜んでくれました。いつも家族への愛情がいっぱいの人でした。

常に何かをしてないと気がすまない性格からか、いつも私たち家族にたくさんの衝撃と笑いを与えてくれた祖母。天国でも変わらず、周りを笑わせてくれるんじゃないかなと思います。25年間、本当にありがとう。

（真羽）

鈴木あき profile

1922(大正11)年8月10日

…山形県西村山郡朝日町宮宿町(現：朝日町宮宿)に生まれる

1937年(昭和12)年3月～4月

…宮宿尋常高等科を卒業後、大阪府岸和田市にあった学校法人実践女学校に入学

1940(昭和15)年4月

…大阪市住吉区(現：阿倍野区)にあった熊谷医院で看護婦の見習いを始める

1942年(昭和17)年

…大阪市南区にあった原田産婆看護学校看護科に入学

→医療法人公道会病院に看護婦として勤務

1943(昭和18)年7月

…大日本赤十字社大阪支部に看護婦として勤務

同年12月

…臨時召集により吹田市にある大阪赤十字社阿倍野病院に異動

1944(昭和19)年2月

…フィリピン島派遣看護婦に選ばれる

同年5月

…フィリピンに到着

1945(昭和20)年8月

…フィリピンで終戦を迎える

同年12月25日

…朝日町の実家に戻る

1947(昭和22)年

…養護教諭普通2級免許状を取得

1980(昭和55年)3月

…退職

2020年7月30日 永眠

※本冊子は本人の記憶に基づき作成したもので、史実と異なる部分がありましたらご容赦ください。

発行/2020(令和2)年12月